

特集 教育・協同を考える

学びとは何か

“もう一つの学校、づくりのころみ



黄柳野高校

北海道自由が丘学園

風の学園

地域教育連絡協議会

地球の子どもの家

高知・中・高生ゼミナール

黄柳野高校にて
撮影：五味 明憲

人間教育花開く

—たくましく共存—

はじめに

みだしは私のつけたタイトルではない。3月9日、黄柳野高校は愛知県内4会場、静岡市との5会場で「つげ野の1年、これからのつげ野」と題して学校報告会をもった。各社取材のうち、中日新聞（10日朝刊）が報じた記事のみだしである。4月開校以来、ほぼ1年、悪戦苦闘のなか、ようやく「ここまでやったのか」の感もちつつ、協同総研の要請に答えて、あら削りながら年間の実践の一端を一文にしたためることにした。

痛恨の5月連休明け

黄柳野高校は決して不登校の生徒や中退者のための高校ではない。今の偏差値輪切りの教育のなかで、大人社会が勝手に分類した、どんな層の子たちにも門戸を開いている学校である。人間はもともと、さまざまな個性の持ち主で構成され、その成員が己れの個性を最大限花開かせる。学校はその一翼を担うはずなのに現実の学校はその逆を歩んでいるのである。これへの挑戦がつげ野なのである。ともあれ、4月開校にあたっては不登校6割、中途退学者3割の学校としてスタートした。

全寮制のもと、4人1部屋の生活が始めから気楽で、たのしい安らぎの場であろうはずがない。ここを人としての切磋琢磨の場として位置づけることはたやすい。だが、ここに住まう者にとっては大変な努力を求められるのだ。何年も家にこもっていた子が24時間の共同生活に身をさらすのだ

広林 卓（愛知県／黄柳野高校・教務主任）

から、余程の自己変革がすすまぬ前には泣きたくなる努力の日々である。率直にいったタバコにしっかりと依存してきた子のタバコ断ちがどんな苦痛なことか。反対に神経質でピリピリした子があの異臭に鳥肌の立つ思いでいることを。昼夜逆転した子に「夜は寝る」の寮のルールに早々となじめるか。子どもたちの悪戦苦闘が始まったのである。

5月連休明け。4月入学から20日足らず。寮生活の再開である。スタッフの「連休で家でリフレッシュしてきたのではないか」の甘い判断は完璧に打ちやぶられた。一夜にして2件のいじめ・暴力事件が起きたのである。1件は1人の子の頭を丸坊主にしてしまった事件。もう1件は深夜、爆竹をならした生徒をスタッフが探すなか、1人の生徒が「それらしき人物をチクッタ」として、その子が深夜3時間に涉っていじめに合うのである。

ここでその全容を検証するつもりはない。だが今、思い出しても被害をうけた生徒がどれほど心に深い痛手をおったことか。思えば胸が痛む。その立ち直りの援助に全力を傾注せねばと思う。とまれ、このとき、私たちは本気になった。それまでの人手不足のグチや労働過重の泣き言は一時保留にして走り出すことになった。まずは事件の全容の解明、20数名に及ぶ生徒の帰宅指導。被害者への学校としての謝罪、加害者を交えてのそれをと、始めの3週間は文字通り、無我夢中であった。電話指導のもどかしさ、指導のいきちがい、手落ち、指導内容の不徹底とつまずきの連続だった。

被害者の深い心の傷への手当の不十分さもくやまれた。だが、一方では私たちの「一生懸命さ」は生徒たちに通じてきた。私たちは「黄柳野ではチクリを死語にしよう」を合言葉にぶつかっていった。こんな狭い校地なのにあんなに子どもが見えなかったのに、今度は狭いからよく見えるようになったのである。方法論として何かあったのかと問われれば「一生懸命さが生徒に通じた」としか言えようがない。スタッフに語る事がチクリでなく、子どもの声としてとどくようになったのである。

若者のささやかな愚行、ケンカはいつでも起きる。だが「あ、A君とB君だな」とその関係がすっきり見えてくるようになった。私は「森の中に光が見えてきた」と叫んだ。だが、本校の方針「1人も切り捨てない」は言うはたやすいが、その実践は大変なことだ。被害者は今も完全に回復し切れていない。加害者も10月始めには全員帰校させたが、もともと心に深い傷を負った子たちであり、そのときはそれを攻撃的にあらわした子たち。この回復に手を差し伸べつづければならない。この貫徹がつけ野の理念を具現するステップであるからと。

仲間づくりと行事・

企画を生徒とともに

一口に生徒の自治といっても型通りの役員選り、課題の提起をしても活動が生み出せるわけではない。今若者を取りまく自主活動の場はほんとうに狭く、いずれの高校でも同様である。黄柳野ではまず各寮で部屋長会議を頻繁に開いた。テーマは「どうしたら静かに寝れるようになるか」「タバコの迷惑をなくすには」等身近な問題をうまず、たゆまず、ねばりよく、うんざりするほどつづけた。ここからみずからの手で解決するには組織的などりくみの必要性が彼らの心に芽生える。寮自治会づくりへすすむ。それでも始めは会長は決まらず寮長会議が代行する。このつみ上げが大切である。ついに夜のサークルづくり、購買部の設置、そしてみずからの手で寮則、寮自治会則づく

りにすすんでいる。(今は新入生歓迎行事企画に全力投入中)

生徒会もどんな行事も実行委員会形式をとり、「〇〇したいなら、この指止まれ」で、人数制限なしの参加者層の掘りおこしは行事成功の大きな力となった。手はじめは1学期末のオールナイトウォーキングだった。豊橋市から黄柳野まで36キロの夜間歩行を支援者、PTAの援助のもとで成功させた。病気の1名を残し、在寮生は全員参加し、ほとんどが完歩しきったのである。1学期末終業式、校長の話に瞳をこらす大多数の生徒たち。4月以来決してなかった顔だ。私はひとつの節をみたの感を深くした。つづいて、10月上旬の学園祭。11月の収穫祭と誠実にとりくみ、一つひとつを成功させていった。いずれも既成の高校のそれと比べても決して劣らないのは40年近く公立校に勤めた私の目からも確認できる。

このような友との交わりのなかで、みずからたたかき、友と攻めぎあい、友を見出し、みだしの通り「たくましく共存」そして生徒はいう「お互いの個性と人格を認めあっての上で」と。

学習の秋に

学校は行事、お祭りの場のみではない。みんなここにあって学ぼう、目的意識をもって学ぼう、黄柳野まではるばる来たんだからテーマをもって日々を送ろうと進まねばならない。同時に学校として単位を取得し、進級していかなければならない。そんなことどうでもよいならフリースクールでよい。

11月からスタッフ主導で秋の大学習運動を提起した。しかもこの運動には1人残らず参加する。①目標が決まり、進級の目途のある人は自己実現にむけて一步をふみ出す、②進級のあやうい人は夜学へ出席し、レポートにとりくむ。(夜学=夜、3時間、特別プログラムによる学習講座を設けた)、③教室での夜学に入ってこれない人は職員室で学ぶ、④以上に加われない人は担任としっかり話し合い目標づくりをすすめる、が開始された。今年末、生徒もスタッフも進級にむけて全力投

球中である。私たちは形式的な「単位取り→進級」にこだわっているのではない。大切なことは不登校をいつまでも引きずり、学習など日常生活のベースがつかみ切れないまま進級させたくない。キチンとやっていける目途を立てさせ、学び始めるステップをつくってやるのがねらいなのである。このとりくみのなかで、みずからがテーマをもって学んで行こうとする生徒の一团があらわれ始めたことである。「HIVを考える」「いじめを考える」サークル等の出現であり、しかも具体的に行動の一步を大きくふみ出していることである。

おわりに

先の報告集会でA君はこんなことを語った。

「地元広島で、遊んで悪いことばかりしていたので黄柳野に入れられた。ここには知っている人もいないし、自分一人だと思っていた。

間もなくしたら謹慎になり、周りの人の目がきつく辞めようと思った。入学したときから辞めようと思っていた。

謹慎解除の後また謹慎になり、親からも辞めるように言われたが、帰りのバスの中で何故か泣けてきて……。ずっとここで生活している。

来年、進級できるかも辞めるかもどうするかもわからないが、今やりたいことが見つかったので、それをこれから頑張ってやっていきたい。」

こうして転び、立ち上がり、つまずきに泣きながら決意をくり返して前へすすもうとする子たちがつげ野には次々と生れている。この報告会に参加者を募ったら40数名が手を上げてくれた。在校200名余の高校である。1000名の高校なら200名、こんな高校があちこちにあるとは思えない。

(紙数の関係で後半は端折った。いずれかの機会があれば再述したい)

“NHKスペシャル” 全国放映

4月21日(日) 21時から、NHKのNHKスペシャルで黄柳野高校の特集が組まれる予定

学校法人 黄柳野学園
黄柳野高等学校

〒441-16 愛知県南設楽郡鳳来町黄柳野字
池田663-1

TEL (05363) 4-0330

FAX (05363) 4-0331



特集 教育・協同を考える／黄柳野塾・設楽

自然の中で共に働き、学ぶ

設立目的

黄柳野塾は、黄柳野高校とともに「黄柳野の教育」の1つの柱として、昨年4月開塾しました。黄柳野の教育を求める子供たちの選択の機会を広げ、交流する場を提供することが目的です。豊かな自然の中で、何かを作るために働きながら、自分自身を見直し、今後の自分のあり方を模索する場としてこの奥三河の地に開塾しました。

1年間の歩み

- ◎【地域の方をお招きし、今後に向けて期待をふくらませた開塾式・4月】
- ◎【7反の畑、草を刈り、耕し、牛糞・鶏糞をまいた5月】

私たちの実習の場は、7反の畑と3aの水田。子供たちはもちろん、スタッフも農業は初めての経験。そんな農業素人人間の集団だからこそ、チャレンジできた無農薬・有機農業。茶摘みやトマトハウスでのアルバイトで身体をほぐし、19日には、田植え（手植え）をしました。

- ◎【ビニールハウスをたて、畝をつくり、トウモロコシ・トマト・なす・きゅうり・かぼちゃ・大豆などの苗を植えた6月】

農学校のパイプを借りて、10坪のハウスを2棟建設。自分たちの城も出来、いよいよ本

黄柳野塾スタッフ一同

格的に始まろうとしている野菜作りに、期待を膨らませているスタッフ。しかし、この頃、子供たちは毎日の畑仕事にあきあきし始めていた。ノルマをこなすために昼すぎに重い体をひきずって畑に出てくる。「こんなの強制労働じゃないか」、不意打ちの、しかし核心をついた言葉が子供たちから飛び出す。スタッフは、「学習したい人には学習を、働きたい人には働くこと」子供たち自ら選択・決定するよう提案。

- ◎【続く畝づくり、苗を植える7月】

一旦は「働く」ことに決めた子供たちだったが、降り続く雨にすっかりペースを乱され、昼夜逆転の生活。皆でいかに遊び、騒ぐかという毎日。楽しさのみを追求する雰囲気が続くある日、「みんな一旦家に帰って考えてみよう。塾でそれぞれ何がしたかったのかゼロから考えよう。」とスタッフは提案。くやし涙、怒りをこえ、それぞれじつくりと今までをふりかえった。

- ◎【それぞれアルバイトに精を出した8月】

イヤイヤではあっても、今までに経験のなかった畝づくりや田植え、そして定植に取り組んだ子供たち。そんな中で不知不識のうちに「働くこと」に自信をもった子供たちは、それぞれアルバイトに全身で打ち込んだ。や

り終えた子供たちから届いたあの弾んだ声が今でも耳の奥に残っている。「いま東京。親が初めて私を信用して、遊んでくることを許してくれたよ！」

◎【農業・養鶏・販売と係を決めて動き始めた9月】

子供たちの自主性を尊重すると言いながら、何をどれだけ植えるかはスタッフがすべて決め、それを押しつけていた1学期。そこで、全員がいつも農業をするのではなく、農業には、自分の畝を作ってそれぞれ自分で選んだ作物の種や苗を植えることで基本的に全員が係わりながら、平素は「係」に分かれて行動することを提案。「農業係」「養鶏係」「販売係」と分かれて行動することに決定。養鶏係は、古い鶏舎をコツコツと修理し始め、販売係は、各地のバザーで販売したり、電話やF a x で注文を受け、品物を発送。

◎【稲を刈り、小豆、大豆を収穫した10月】

10月10日事前の塾舎に移転。目の前にテニスコートが広がる開放感のある環境に子供たちも興奮気味。それぞれの仕事を終え、夕食後、22:00頃までテニスや野菜に取り組む毎日が続く。1学期とは異なり、子供たち一人ひとり塾を作っていく「担い手」として大きな力を発揮するまでに成長。

自分で作物を決め、種を蒔き、それが一人前の野菜として立派に成長。自分の作物を通して自然と素直に向き合って作物を育てた喜び、育った感動。1学期にあれば農作業を嫌がっていた子供たちが、積極的に畝づくり、草抜きに取り組んでいる姿にスタッフが感動。

◎【タマネギを植え、自分の畑でできた作物を収穫し、名古屋コーチンのひな100羽を迎え、

販路開拓に町へくりだした11月】

◎【収穫した大豆で豆腐をつくり、大根などを収穫し、稲の脱穀・もみすりをやり、採卵用の鶏を100羽迎え、年末年始用の販売にチラシを配布した12月】

11月6日、初氷・初霜。ナス、ししとう、トマト、地這キュウリが全滅しました。標高650mの名倉高原の本格的な冬の訪れの幕開けでした。そんな中、鶏たちは、寒さに負けず、12月27日、初めて卵が10ヶ1パックそろいました。

◎【収穫した大根を十分天日に干し、漬物にしたり、洞窟探検や、2月のマレーシア行きにそなえ、マレー出身のパン・アチンさんを招いてマレー料理の研究をした1月】

◎【マレーシアへの海外研修で、たくさんのエピソードが生まれた2月。英語の勉強の必要性もちょっぴり感じました】

寒い時は、マイナス15度になるここ名倉高原。私たち全員、初めて経験する寒さです。そんな中でこの一年間、農業では、畑づくり始まり、色々な野菜づくり、養鶏では、餌のやり方はもちろん、生まれたてのかわいいヒヨコが成鶏になる過程、販売で、色々な人と接触すること、その他、わらじづくり、コンニャクづくり、豆腐づくり、味噌づくり等の「何かをつくること」を基本に色々な体験をしました。また、太鼓のプロ集団との交流、マレーシアでの外国人との交流等、人や自然とのふれあいの中で塾生だけでなく、私たちスタッフにとっても、一人ひとりが大きな物を得た一年だったと思います。

来年度に向けて

この1年間を振り返った時、ほとんどの子供が大きく変わりました。話せなかった（自分を出せ

なかった)子が、自分の意志を出せるようになったり、話せる子は、他人を思いやる心が場面々々で出てくるようになりました。また、少人数での共同生活の中で、仲間やスタッフに心を開き、人間関係を結べるようになった子、これらは大きな成果として一定の評価が出来ると思います。しかし反面、塾に適應出来ず、去っていった子供も出てきました。年度末の現在、来年度の「塾のあり方」が見えるように、「子供たちにとって、黄柳野塾はどうだったか」という観点で、一人ひとりのテーマとその到達度の確認をしています。そして、「塾としての役割・使命は何なのか」「単なる

精神的な癒しの場になっていなかったか」「自立へのとっかかりをつかむための環境づくりは出来たのか」等々、根本的なところでの問いなおしをしています。

子供たち一人ひとりにとって、本当に意義ある黄柳野塾作りを、多くの方々のお知恵を頂きながらしていきたいと思っています。

黄柳野塾・設楽

愛知県北設楽郡設楽町大字川向字市場口山 2

TEL 05366-5-0303

FAX 06366-5-0388

特集 教育・協同を考える／共につくる会

「人間教育をすすめる学園と共につくる浜松の会」の結成と黄柳野高校

佐々木 忠栄 (静岡県／「共につくる浜松の会」事務局長)

「人間教育をすすめる学園を共につくる浜松の会」(以下簡単に、「共浜会」という)の結成と黄柳野高校とのかかわりについて述べていきます。しかし、「共浜会」の誕生は「共につくる会」本部発展の過程から生まれています。そこで、「共につくる会」本部について、手元の資料等を参考にしながら、簡単に説明したいと思います。

黄柳野高校設立準備委員会が1990年4月に発足しますが、それと同時に、「人間教育をすすめる学園を共につくる会」の発足準備も進められ、同年9月には山田正敏先生(愛知県立大教授)を会長として、正式発足しました。

黄柳野高校と「共につくる会」とのかかわりについては、黄柳野高校設立趣意書及び「共につくる会」の会則から明確につかみとることができます。

設立趣意書は、「私たちは、人間の全面発達を

すすめるために、子ども達の持っている多様な可能性・能力をひきだし、心の自由と自立・連帯を育て、情操・自己表現を重視した教育を実現するための学校を多くの皆さんとの協同の力で創ることを決意しました。」と述べているように、協同の力による「人間教育をすすめる学園づくり」が提起されています。一方「共につくる会」の会則には「今、人間教育をすすめる学園づくりがすすめられています。この学園は多くの人々の手によってつくられ、親の願い、地域の願い、こども達の願いを実現できるものにしていきたいと思っています。

そのために「共につくる会」が設立されました。黄柳野高校の設立を教育内容と資金面で支えると同時に、多くの方々と共に教育というものを考え、人間教育をすすめる学園を全国各地に広めていく会です。」と規定しています。